

ゼロからの出発

——新寺建立十五年の軌跡——

佐藤俊明

はじめに

経過

横浜市港南区の日野公園墓地（十一万坪）の正門近くに新寺「善光寺」がある。

檀信徒ゼロから出発して、開創わずか十五周年にして檀信徒二千を擁している。この驚異的發展の軌跡は何か。新興宗教に押しまくられている既成教団としてそれは一瞥に価するものである。

一、昭和三六年、林堅峰師（三重県福源寺住職・当時大本山総持寺知客^{しか}）、この地に小庵を結び「長光寺」と称したが、寺号公称に至らないまま、四三年、不遇のうちに遷化した。

二、翌四四年二月、アメリカから帰ったばかりの黒田武志師（三二歳）、この地の将来性を見抜き、すでに人手に渡っていたこの小庵に六百万円を投じて譲り

受け、同年十一月二八日宗教法人「善光寺」として新寺建立につき県知事の認証を得、大阪の成寿堂本舖ナリス化粧品（現在の株式会社ナリス化粧品）社長村岡満義氏を開基に請した。ついで十二月二日、伊藤喜三郎氏（現総代・伊藤喜三郎建築研究所長）夫妻並びに前記村岡満義氏夫妻を媒酌人として倫子夫人との結婚式を挙げた。

三、翌四五年一月八日、地鎮祭を挙行し、本殿及び客殿三五坪を建立した。（坪当り工事費一〇万円）併せて、土地一六四坪（坪単位一〇万円）を購入し、開基家村岡氏及びナリス化粧品社員一同より一千万円の浄財喜捨を受け、四五、四六の兩年をもつて支払いを完了した。

四、四七年七月、本堂及び客殿七五坪の増築に着手（工事費千八百万円）、十一月二八日、晋山式及び落慶式を挙行した。こうして当時檀徒数四六〇世帯に達したので、五ヶ年計画を樹立し、檀徒数一千世帯確保を目標にして諸行事を展開しはじめた。

五、五五年、目標をはるかに突破して檀徒数一、六〇〇世帯を数えるに至り、かねて発願の釈迦殿建立の構想を発表し、伊藤喜三郎建築事務所設計を、水沢工務店に施工を依頼し、五六年五月三十日着工、翌五七年十月四日落慶式を挙行した。総工費、土地取得費を含めて三億七千万円。引き続き旧館の増築に五千万円を投じ、五八年五月、工事を完了した。

六、五八年五月二八日、開創十五周年記念式典を挙行した。

黒田師の経歴

黒田武志師は、栃木県大田原市の光真寺（子育て地藏尊講員一人をもつ由緒ある寺）住職黒田白純師（五四二年二月四日遷化）の六男として生まれ、駒沢の大学院で修士課程修了（三七年）、引き続き総持寺に上山安居し、九月送行（そうあん下山）して、十月永平寺に安居したが四大不調のため一ヶ月で送行し、全国を托鉢行脚し

た。そして翌三八年、新たに開設された特別僧堂第一期生として総持寺に上山安居した。ここで、翌三八年、夏季摂心会の際、村岡満義氏一行と劇的な出会いをすることになるが、それは後述する。

総持寺を送行して、インド佛蹟を巡拝し、伊藤喜三郎氏と初相見、一大転機に恵まれる。巡拝終ってタイ国ワット・パクナムで出家得度し、上座部佛教の僧侶として修行すること一年半、帰国して高階管長の秘書となり、さらに修行を志し、開教師としてロスアンゼルス禅センター（主管は師の実兄前角博雄師——母方の姓を名乗る——）に勤務すること二年、帰国早々新寺建立を決意し、直ちに活動を展開する。

新寺建立の趣意書に曰く

真の平和と人類の幸福は、正しい教えによって創られるものであります。物質文明と精神文化の不調和に悩む現代の私達の生活に、再び調和とやすらぎを取り戻すことは宗教によると信じます。

大聖釈尊のお説きになられた生きた正しい教えを

高揚し、世界平和と人類福祉の向上に貢献いたしたく横浜市日野公園の一角に、佛祖礼拝、祖先崇拜、参禅道場、青少年教化センター、また多くの人々の心の憩い場所として新寺の建立を願いました
……（以下略）

こうして新寺建立はその緒にいたのであるが、これが軌道に乗り、発展の道を辿るには、それを支えた大きな力があるわけであり、それは何なのかについて述べてみよう。

恵まれた出会い

昭和五八年五月二八日、開創十五周年記念式典の際、開基家の代理として出席した株式会社ナリス化粧品常務取締役東郷敏氏は祝辞の中で次のように述べている。

私が方丈とめぐり会いさせていただいたのは、総持寺の夏季摂心におきまして、たしか昭和三八年で

あったと思います。その時に私、はじめて、先代社長開基に連れられまして、唯給料のためにといいイヤイヤながらも坐禅にいつて参りました。その時に、私は人より筋肉が堅く坐れないものですから、とにかく姿勢が悪かったのでしょう。もうほんとうに感情こめて叩きあげられる方がありましたので、坐禅よりも私は恨みを持って、その御当人を確認させていただいたのが、只今の方丈であるわけです。それで、私のその恨みは消えるものではございませんので、いよいよ打ち上げの日に、私は先代や現社長とともに帰り仕度をさせていただいております。そこへ飛び込んで来られたのが只今の方丈でございます。私は申し上げたんです。

「先生、悟りというものは何ですか」と。そしたら先生は、「ワツハツハツ。悟りがわかれば、私はこんな所におりませんよ」

アレッとと思いました。この人はお坊さんなんだけど悟りもわからん。われわれといっしょだったんだ



東郷敏氏と共に

なアと思いい何ともいえない親しみと、何ともいえない安堵感をもちまして、ひよっとしてこの先生と将来連れ立って、ついてゆけば将来いいことがあるんじゃないかと、そのような気がしたもんですから、先代に、実はこの方が一番強く恨みを持って叩いて

おった……あの叩きには何かワケがあるのではないか、是非会社にお呼びして私どもの坐禅の指導をしていただきたいものだと申し上げましたら、それはいいことだ、ぜひ呼ぼう、ということになりました。三日目でございました。総持寺に電話させていただきました。

「こういうことでございますので、先生、社員教育においていただけませんか」と申し上げましたら、「いかせていただきます。いつですか」と、おっしゃるから、

「あしたです」といったら「いきます」といわれて、おいでいただいて、その時二泊三日会社を休んで全社員が坐禅をご指導いただいたわけでございます。私は、叩かれたことに対し何か反抗的にもお返ししたい気持ちございましたので、幹部社員十五人ぐらゐと、何とか仕返しのための打ち合わせをして、先生をこらしめるにはこれしかないというんで、とにかく、全員が最初から最後まで、警策を受けるため

合掌をしつづけていこう、そうすれば叩かなければいかんのだから、叩き続ける先生はきつと参るだろうというんで、さア、一時間に恐らく三百ぐらいの警策を受け続けまして、私たちの衣は破けますし、血はふき出ますし、一方先生の手はだらんと息づかいはハア／＼、手は豆がはじけて真赤になっています。先代が申しました。

「お前らの坐禅ではない。あれは喧嘩だ！ あんなことをしたらいかん……」と、いうわけで、傷だらけの中ではじめて先生に対し男が男に惚れるといましようか、闘いのあとに心と心が結びあい、とにかく抱きついて、共に生きたいという、そんな気が培かわれまして、以来深いご縁が続いたのであります。先生はそれから間もなく総持寺での修行を終えられ、間もなく大阪に來られて、

「社長、インドとタイにいきたいんだが」ということで、お釈迦さんの生誕の地で修行なさりたい様子、それには一銭の金もありません、という

ことで、それならばというんで、社員こぞって協力
させていただいた訳です。一年後インドとタイから
帰られて、まだその報告の口がかわかぬ間に、今度
はアメリカに行つて坐禪の布教をしたい、とこうお
っしゃつて、またアメリカの方へお行きになられる
訳です。とにかく先生と付き合つてからは私たちは
追いまくられ、先生が来られると、ゾツとすること
ばかり続く。けれども先代の社長という方が、なん
にも言わずこの方に、この方に、ということをやつ
ていきますと、その心が会社の結束、ナリスの利益
に還元され、不思議とナリスは先生を知ることによ
つてどんどん売り上げもあがり、利益も上げさせて
いただきました。ですから、先生とのご縁は更に深
まり、佛の道を通して先生はナリスの利益、貢献に
大きくお力添えいただいたわけでございます。私た
ちはあきんどでございますから、きれいな心は持ち
合わせておりません。でも、もうけたお金をどんど
ん人様のために使つてくださるのが先生だったわけ

でございます。

そして丁度十五年前でございます。今日の十五年
は先生の結婚十五年でもあるのです。たしか七月で
した。私が東京に出張して参りました時、先生が東
京の支店においてになりました。



ナリス化粧品村岡社長

「先生、また何ですか」といったら、

「実は東郷さん、これなんだけど……」

「これって何ですか」

「ちよつと見てくれ」

と見させてもらったのが、あばら屋が一軒の写真だった訳です。

「実はここにどうしても寺を興こしたいんだ。私は急いでるんです。心の救済を、私、やらせてもらわなければいかんのだが、お金がないんじや」と。

「ホラまた来た」と思つて、「そら先生、簡単にお金は集まるもんじやありません。会社もそういつまでもお金があるものではありませんけど、先生がおつしやるのだから社長に話してみますが、いくらですか」といったら、

「七百二十万円かかります」と。今から十五年前でございいますからいまなら丁度一億ぐらいのお金に感じます。

「それじゃ先生、ほんとうに買うんですか」

「買いたい。きまつた会社のお金よりも一人一人の小さなお金がほしいんです」と、貰うについても条件をつけられるわけです。ほんで、「東郷さん、あんな北海道から沖繩まで歩いてるから、その間に、できたら一人一人話をしてお金集めてくれないか」といわれるから、訳もわからぬまま私は約束を
してしまい、

「じゃ先生、集めましょう。何年ぐらいですか」と
いったら、

「三ヶ月です」とおつしやるんです。

「そりや先生、三ヶ月じゃ集まらん」といったら、
「あの土地も家も、三ヶ月時間をおいてしまつたら
無くなります。誰かに渡つてしまいます」と、それはもう一方的なんです。

私も今まで物を売ったことはございしますが、けれども思想とお名前で金を集めたことはなかつたのです。それで社長に申し上げまして、北海道から沖繩まで小錢を集めて廻り、約千名ぐらいに達したと思

います。

話は前後しましたが、その時です、その話を終ると同時に、

「東郷さん、実は今日、私は見合いをします」と。

「見合いって何ですか」といったら、

「実は、もう独身協会会長をやめて、私も結婚する気になった。寺を建てるにはやっぱり女房がなくてはいかん」

「そりやね、先生、困ります。金は欲しい、結婚はしたいでは困るんです。それで見合いはいつ、どこですか」といったら、

「不忍の池の、あのホテルのロビーです。この話が終れば、私、そこにいくんです」

「そりや先生、困ります。その女の人を断ってください。断われなければ、先生、私が行って断ってあげます」

と申し上げ、結局私は先生といっしょにその見合いをぶっこわしにいったわけです。そして、今度は

私の方から、

「先生、永平寺の単頭たなぢ老師のお嬢さんで、倫子さんという方がナリスの社員で、社長の秘書でいらっしやるんです。あの方をもらってください。好き嫌いの問題ではありません、お金の問題です。あの方さ



えもらつてくださったれば、あの方の名前を使って、私はお金を集められます」といったんです。さいわい先生は、倫子夫人に一目惚れでございました。そしてついに十一月に千名の方から約一千万円のお金が集まりました、このお蔭で、善光寺の第一日、第一歩があつた訳です。それで、先生の心意気というか情熱とおうか、私もこの先生のすべてに傾倒してしまいました。ナリスの先代をはじめ現社長は、できる精一杯を善光寺に尽され、ほんとうにこの方に惚れてしまつてからは、何かとさらにさらに深く繁つて心を通わせているうちに、会社もいよいよ発展し、善光寺は黒田大圓和尚の全人格が表現され、まことにもつて隆々とした、善光寺の足跡を見させていただくことになりました……

長々と引用したが、開基家及びナリス化粧品との出会い、そしてその後の緊密な関係、さらには黒田師の人柄を知り、発展の軌跡をさぐるには、ぜひ一読してもらいたい一文である。

次に伊藤喜三郎氏とは、昭和三八年十二月、伊藤氏がインドに癩センターを設計され、その竣工式に出席された時たまたま初相見の機会に恵まれ、いっしょに四大聖地を巡拝し、伊藤氏は帰日し、黒田師はタイに残るといふことでバンコックでご馳走にあずかり叱咤激励されたのが縁で伊藤氏からも格外の協力をいただいている。それに石屋さん。月刊『任職』（四五年八月号）に、「檀徒急増の理由」として、黒田師は質問に答えて次のように述べている。

「数だけでいえば、年間二百世帯の割り合いで増えています。理由はいろいろありますが、立地条件がいいんです。日野霊園には三万基の墓碑があり、菩提寺を持たないものがかなり（約四割）あるんですよ。そういう人たちが入檀しています。また霊園の周辺には十軒の石材屋があります。その店の紹介で入檀するケースも多いんです」

こういう恵まれた立地条件なのに、日野町にある六カ寺の住職は、黒田師を除いて多くは二足のわらじば

きて、日曜日以外は寺にいない。そこへもつてきて、黒田師は、葬式の場合など、「お金はいりませんヨ、誠心誠意やらせていただきます」ということをモットーにして実行して来ている。そこで葬儀屋や石屋がバックアップしてくれ、口コミで檀家がどんどんふえ、当初の目標は檀家三百戸獲得。次は五百、八百と目標をアップして開創五周年の時は六百、昭和五三年、十周年の時は千軒を越すといった状況である。

次に、佛さまとの出会いについて一言したい。

黒田師が三十歳になって、インドの佛蹟巡拝をしてタイで修行しようとした時、世の中に何も残してないわが身をふりかえり、もしタイで修行中万一の事があった時、佛さまだけでも無事帰れるようにと念持佛を作ることにし、永平寺の門前で山口という佛師を訪れたところ、素晴らしい不動明王をお受けする機縁に恵まれ、外遊中は師寮寺に預かってもらい、帰国して新寺建立とともに勧請したのが身代り不動明王、この不動明王は常に身を変じてどんな願いでも叶えてくださる

と黒田師は確信している。それから円空佛と中国元朝時代（一二六五〜一三五二）作の聖観音、これは伊藤喜三郎氏の寄進によるもので、前者の働きは日限不動



伊藤喜三郎氏

明王で、日に千里の行程を往還するという。後者はおよそ禱祈するあれば必ず感應を蒙るといわれる。それから七宝焼きの釈迦像、これはお姿は釈迦像だが薬師さまのはたらしをなさる。その他、タイ、ビルマの佛像を実に数多く勧請しておられる。それから、開創十周年記念事業として、般若心経一万巻写経と聖観音さまの勧請を發願した。これは高村光雲の弟子で、鑄型では第一人者の沢野盛一氏に製作を依頼した。高村光雲が七十年前に聖観音をつくられ、それが出世作となったが、それを鑄造したのが沢野氏で、爾来、沢野氏は高村光雲に認められて出世するのだが、高村光雲の出世作聖観音像を三尺三寸に拡大して世に残したいというのが沢野氏一生の念願だった。その念願を叶えさせてあげることが出来、その因縁と心経写経一万巻納経の勝縁によって釈迦殿建立の土地を入手することができたという。

それから黒田師はかねて、宗祖を通して釈尊に還る、ということ念願としていた。日本一周旅行も実は各

地の佛舍利塔参拝が最大の目的だった。そうした願行に自然と舍利塔が沢山集まることにもなった。また、黒田師がワット・パクナムで修行中、住職のプラ・ダンマテラララージャマホームニをお願いして、高階管長と真如苑にお佛舍利を奉呈していただいたが、その際黒田師も奉戴した。その年の秋、タイのチェンマイで世界佛教徒会議があり、高階管下と真如苑教主が日本代表で出席された。その折、ワット・パクナムに答礼に行かれたが、そのお世話をしたお礼として真如苑から、教主謹刻の涅槃像をいただいている。

こうした実に多くの佛さま方によって黒田師は護られ、その加被力により善光寺は驚異的な発展をとげているのである。

寺門経営

黒田師が手始めにおこなったのは日曜学校だった。鶴見大学の保育科の学生を三、四人呼び、近くの子ど

もたちを集めておこなったが、どんどん檀家がふえて寺務が多忙になったため、これは三年でストップし、寺本来の事業に専念することになった。現在おこなわれている善光寺の年中行事は次のとおりである。

新年祈禱会	一月
節分会	二月
開山忌 定例総代会	二月
青年会総会	二月
春彼岸法会	三月
花まつり法会 婦人会総会	四月
婦人会研修会	五月
不動明王大祭	五月
大施餓鬼会	七月
棚 経 (お盆供養)	七月
本寺光真寺参拝 参拝旅行	七月
医事・身上相談	九月
秋彼岸法会	九月
お茶会	十月

七五三祈禱会 十一月

成道会 十二月

写経会 毎月第一土曜日

参禅会 毎月第二土曜日

佛典研究会 毎月第三土曜日

茶道教室 (裏千家) 毎月第一、第二、第三月曜日

寺報『成寿』発行 年四回発行不定期

実に多彩な活動を展開している。黒田師は、寺は行事さえすれば檀家はふえるとの確信のもとに行事の充実をはかっている。はじめは大分苦勞したらしい。昭和四五年二月はじめて節分会の行事をおこなったが、その時は本寺光真寺から福マス三十個を借りて来て、光真寺の焼印の上に紙を張ってやり、お客はたった十人だったというが、今日では数百人になっている。

行事は単発でなく継続して実施することが大切であり、また必ず法話を入れる。法話のない時は咄家を呼んだり、または、福引きやバザーなどをおこない、参詣者に、寺との交流、参詣者相互の心のふれあい、そ

して物心両面のおみやげを持ち帰ってもらい、寺に来てよかつたというよろこびとやすらぎを得てもらおうとつとめている。

関係団体の活動も活発である。関係団体は次の通り。

- 成寿山善光寺護持会
- 成寿山不動明王奉讃会
- 成寿山善光寺參禅会
- 成寿山善光寺写経会
- 成寿山甲子大黒天講
- 成寿山善光寺青年会
- 成寿山善光寺婦人会
- 成寿山福祉相談所
- 成寿山善光寺子供会
- 成寿山善光寺茶道会
- 成寿山善光寺佛真会

行事はこれら関係団体とタイアップし、または関係団体が独自でおこなう場合もある。ここで特異な行事を紹介すると、



茶会風景

前記医事相談である。善光寺檀徒総代防衛医科大学教授中村治雄氏が毎年九月十五日敬老の日に無料健康診断をおこなう。中村氏はいう。「黒田住職のすばらしいアイデアです。これまで多くの方々を診てますが、病気を発見した例もいくつかあります。この相談では専門医の紹介までおこないます。カルテはお寺に保存してあります」

葬式佛教から脱皮した多彩な活動を続ける善光寺であれば、事務局がしっかり確立されなくてはならない。事務局員は現在では五十名のスタッフがおり、その職業は、会社社長から医師、デザイナー、司書、タクシ―運転手までさまざまで、まさに総合プロジェクトチームである。法要の数が多いので典座寮々員の数も多い。

むすび

都会の寺でさえも兼職を持っている住職があるくら

いなので、過疎地帯の寺であれば、兼職なしには食輪が転じない。

その際、出来得れば第一種兼業、つまり用僧によって収入を得ることは誰しもが望むところであるが、それにこたえる寺がなかったり、あつてもお布施が少なかつたりして、止むを得ず第二種兼業に走らざるを得ないのが大部分であろう。これは宗門的な大きな問題であるが、何等の措置も講じられていない。黒田師はこの状態を憂い、檀徒数の少ない寺と密接な連けいを取り自らの檀務を処理するとともに小寺院のヘルプに意を用いている。

今後の寺院経営に必要なのは人である。一にも人、二にも人、黒田師はこの考えのもとに、しっかりとブレインづくりに努力し、併せて人材育成に意欲を燃やしている。その一環として近く発表を予定しているものに海外留学僧派遣育英会の設立がある。アメリカやタイに留学僧を派遣し、将来の善光寺のブレインとするとともに日本の佛教界に寄与しようという遠大な

計画である。

最後に、善光寺開山は黒田武志師の本師棟庵白純大和尚であり、黒田師が日野の小庵を入手し得たのは棟庵白純大和尚が総持寺副監院在任時の勝縁によつたものである。



医事相談中の中村治雄氏